

青森県の橋の歴史から見た地域の感性 — 岩木川水系に架かる橋 —

四 方 紅美代*・長谷川 明**

On the Sensibility of the Local Area in Aomori Prefecture through the History of Bridges — Bridges across Iwaki river —

Kumiyo SHIKATA* and Akira HASEGAWA**

Abstract

From old times, bridges have been constructed by the people. The people who used them, have introduced their mind to the bridges. The people who use it, think the bridges as a tool of their life with feeling the useful traffic access. The bridges should be recognized as the local bridges or home bridges, and the scenery including the bridges might become one of hearty scenery of their home land. In this paper, the design of bridges, especially the name of the bridges, are discussed with the history of bridges, for instance, the history of Tsugaru local area in Aomori prefecture Japan and the bridges across Iwaki river through the area.

Key words: sensibility of the local area, design of bridges, name of bridges, history of Bridges

1. 研究目的

橋は、交通・運輸手段としてのみならず、“人”と“地域”をも結ぶ土木構造物である。古い時代、橋は生活者主体ではなく、国、時代の権力者のものであり、形状なども単調であった。もちろん、材料、技術的な面で、現代ほど発達していなかった背景もある。現代の橋は、どうであろうか。“公共の橋”として、計画・設計・架設・管理を国、県、市など公的機関が行う。また、架設する土地の地域性が、橋梁デザイン面などで組み込まれる傾向にある。これが、地域生活者の交通などの利便性を高めつつ、“地域の橋”の認識を視覚的、精神的に結びつける。さらに、生活に密着した橋は、個々の視覚や心象に作用し、郷土風景のひとつを構成する。

古い時代から現代に至るまで、その時代ごとの公的機関が橋を架けてきた。そして、その橋には利用する側である地域住民の“橋への思い”が込められている。

本研究では、青森県の橋の歴史と共に、橋名称などに込められた地域生活者の思いなど精神面に着目し、地域の感性を込めた橋梁デザインについて考えたい。

青森県は、奥羽山脈を境に、西側の津軽平野を岩木川が流れ、東側は三本木原台地を馬淵川が流れる。この西側の地域を「津軽」、東側を「南部」と称する。この二つの地域は、同一県内でありながらも、地形、自然環境、古い歴史などから培われた地域的な感性の違いを有する。

今回、津軽地方の歴史に深い関わりを持つ岩木川に着目し、近世から架設された橋とその名称から、地域の感性と橋梁デザインについてまとめる。

2. 岩木川に架かる橋

岩木川は、津軽の“母なる川”として、古くから津軽地域住民の生業、生産を支える河川である。これは、現代にも受け継がれている。ここでは、江戸から明治時代にかけての岩木川についてまとめる。戦後から急速に情報、技術などあらゆる文化・文明が発達し、“地域らしさ”などが薄れつつある。これは、津軽地域だけではない。岩木川に架かる橋に込められた地域の思いを、昔を振り返ることで読み取りたい。

2.1 岩木川の概略

岩木川は、一級河川である。その源流は、青森・秋田県境の世界遺産「白神山地」の一角をなす、雁森岳（標高 987 m）である。目屋ダムを経て東流し、弘前市付近で奥羽山脈から発する平川、五所川原市付近で十川等の支川を合わせ十三湖へと注ぐ。さらに、山田川などの支川を十三湖内に集め、十三湖水戸口を経て、日本海に注ぐ。

古い時代、平川、浅瀬石川が岩木川に合流する扇状の流域である弘前市付近では、沿川に氾濫の被害をもたらしていた。岩木川の治水事業は、藩政時代から新田開発とともに行われている。本格的には、大正7年から国が直轄工事として着手し、十三湖岸堤、目屋ダム、十川開削、浅瀬石川ダムなどが竣工された。岩木川の流域には3市22町11村があり、幹線流路延長は102 km、流域面積 2,540 km² である。

2.2 岩木川の活用

(1) 生業・生産の利用

江戸時代の生業は、“米”主体の農業で、“米”が重要であった。津軽藩では、収穫高を増加させるために、平野

平成 16 年 12 月 17 日受理

* 八戸工業大学大学院・研究生

** 八戸工業大学大学院土木工学専攻・教授

表1. 津軽藩の新田開発の歩み

津軽藩主	年号	西暦	史事
初代 為信 二代 信枚 三代 信義	自 天正 18 年 至 承徳 4 年	1590 1655	津軽開発の創始期 総新田方 109,800 余石 村数 108 村
四代 信政 五代 信寿 九代 寧親	自 明歴 2 年 至 文化 7 年	1656 1824	振興期 綿密な開発計画による基礎的な津軽の開発を 完成した時代
十代 信順 十一代 順承 十二代 承昭	自 文化 8 年 至 明治 4 年	1825 1871	完成期 津軽平野開発の最終段階 廃田開発の補足の年代

※ 『津軽平野と岩木川のあゆみ』⁵⁾ より引用

から湿地を問わず、新田開発に勤しんだ。現在の岩木川流域にある市町村の多くは、津軽藩政時代の新田開発で開けた歴史を持っている。

初代津軽藩主である為信は、藩の財政基盤確立と繁栄を目指し開発を進め、これは津軽藩主に代々、受け継がれて行く(表1)。また、岩木川水系の水を頼りに新田を開発すると共に、河川の改修、灌漑用水路の開削、ため池の築造も成された。代表的なものには、木造町の土淵堰、五所川原市の五所川原堰がある。また、流域内に溜池が611個ほど確認されている。

(2) 運輸・交通の利用

近代までの運輸・交通手段は、道路、渡船、橋梁、水運である。人力車、馬車や鉄道が導入されたのは、明治時代以降からである。

江戸時代、幕府の治安対策のための架橋を認めない対諸藩対策のため、奥州街道筋の河川にも架橋が少なかった。また、津軽藩内の交通網においても橋は少なく、渡船や歩行越で河川を渡っていた。

2.3 岩木川に架かる橋

江戸時代には、岩木川を始め河川に架かる橋を誰が架け、管理していたのかについて述べる。この時期の橋の歴史をまとめると以下のようなになる。

- ・橋の材料は土橋、木橋、石橋である。
- ・架橋、管理は津軽藩である。
- ・1758年から各農村の農村橋梁代官が橋梁を管理した。
- ・1771年から村々の小橋を土橋に改造するように藩命を出す。

江戸から明治時代まで津軽藩が管理していた橋は、土橋、木橋、石橋を合わせ3,558本である(表2)。岩木川水系が流れる地域は、西津軽郡を除く地域である。これを踏まえて、再度、表2を見た場合、中、南、北津軽郡の橋は、2,694本である。これらの郡にある橋は、全体的におよそ42%が土橋で、石橋が33%、木橋は26%であった(表3)。津軽藩が管理した橋は、中小のものであったと考えられる。特に、石橋の多くは、小規模なものと推

察される。架橋幅や河川条件などによって、木橋、土橋が架けられたのであろう。1771年に出された藩命から、村々の小橋は、木橋から土橋となる。これは、洪水対策や経済性から土橋に改造したものと考えられる。

津軽藩が管理していた橋は、明治維新となり、1875年から20ヶ年賦に地元払い下げられた。しかし、岩木川に架かる橋の多くは、明治時代以降からの架設が多い。

藩政時代の岩木川の特徴は、上流部の地形が急勾配、下流部は平野で急に緩くなることから、常に水との戦いであった。大雨が降れば河川が氾濫し、田畑も橋も流される。年に一度、多いときでは1年に幾度も氾濫した。

津軽藩時代の記録に出てくる橋は、慶長16年(1611)の「先達ヶ淵に架けた橋」とある。この頃の岩木川は、真土で二筋に分かれていた。一筋は駒越方面、もう一筋は茂森方面から新町に出て弘前城天守閣の下紺屋町へ流れていた。「先達ヶ淵に架けた橋」の淵は大淵で、付近の生活者は非常に難儀した。これ以降、何本かの架橋を記載しているが、水害による流出被害が絶えず、非常に厳しい状況であったことが伺える。

明治時代の初期、岩木川流域に架かる橋は、弘前市周

表2. 明治時代初期(藩管理)流域の架設状況

	土橋	木橋	石橋	計
西津軽郡	333	238	293	864
中津軽郡	283	202	220	705
南津軽郡	400	285	320	1,005
北津軽郡	433	209	342	984
計	1,449	934	1,175	3,558

表3. 岩木川水系の橋の割合(%)

	土橋	木橋	石橋	計
中津軽郡	40.14	28.65	31.21	100.00
南津軽郡	39.80	28.36	31.84	100.00
北津軽郡	44.00	21.24	34.76	100.00
平均	41.31	26.08	32.60	—

辺を主体に架設された(表4)。また、明治時代の末期には、架橋箇所も広がり、長径間となり、かつ本数が増えている(表5)。ここで注目すべき点は、明治時代末期に架けられた橋のうち、16本もの橋が私費で行われていることである。

これらをまとめて図1に示す。図からは、明治の初め、弘前、黒石市周辺から大橋の架設が行われたことが分かる。明治の後半からは、岩木川水系流域に点在した架設が行われている。

2.4 岩木川に架かる橋への地域住民の思い

表4, 5に示した岩木川に架かる橋の名前には、橋に込められた由来がある。管理者が管理し易い、あるいは地域の人々の思いを主体に名称の由来を考えると、橋の名前は、以下の5つに分類できる。

- (1) 橋が架けられた土地の名前から命名された。
- (2) 橋が架けられている河川名から命名された。
- (3) 橋がどこに架かっているのか、橋の名前に地域の特徴を入れて命名された。
- (4) 橋そのものに込めた思いから命名された。
- (5) 集落にまつわる事柄と結びつけた命名された。

この5つの分類から橋の名前を見た場合、土地、河川のほか、地域情報が橋名に含まれている。

ここで、表4, 5に記載した橋を、5つに分類し図2に示す。明治時代の初期と末期の橋を合わせると、大橋は45本が架けられた。初期の橋には、地名が多く使われている。末期は私費による橋が多く、それらの橋の中には、集落にまつわる内容が含まれた命名がある。

まとめると次のようになる。

① 橋が架けられた土地の名前から命名

名称と架橋地を見ると、架橋された土地と同じ橋名が見受けられる。たとえば、藤代村三世寺に架橋された橋の名前は、「三世寺橋」、豊田村境関では、「境関橋」と命名されている。

津軽藩政時代の新田開発で開けた集落には、集落名、その土地の名前自体に意味が込められる。これを踏まえて考える。“どこの橋”という情報と共に、土地の生活者の意識の中に、“この土地の橋”という情報が含まれている。

② 橋が架けられている河川名から命名

これも、表4, 5に記載したもののから名称と架橋地と橋名から読み取ることができる。弘前市駒越の岩木川に架かる橋名は、「岩木橋」であり、千年村の大和沢川に架かる橋では、「大和沢橋」である。土地から命名した橋名と同じく、この名前には、“どこの川の橋”と言う情報が含まれる。

③ 橋がどこに架かっているのか、橋の名前に地域の特徴を入れて命名

地域情報を持つ橋名とは、地名、河川名、主体となるものの位置関係から名づけられた場合である。土地、河川名からの橋の名前は、土地の生活者、外部の人に、“どこにある橋”と簡単に分かる情報が含まれている。主体となる位置関係から、命名には乾橋が顕著である。これは、架設された明治時代に、北津軽郡庁から見た橋が、「乾(戌亥)」の方向にあることから命名された由来を持っている。これらから、生活に密着した橋には、地域情報が

表4. 明治時代初期 流域の大橋架設状況

河川名	所在地	橋名	長さ		幅		橋質	分類番号
			(間)	(m)	(間)	(m)		
岩木川	弘前市浜ノ町	石渡橋	85	153.0	2.1	3.8	木橋	5
土淵川	弘前市土手町	蓬萊橋	10	18.0	3.0	5.4	木橋	4
土淵川	弘前市新寺町	日暮橋	10	18.0	2.3	4.1	木橋	5
土淵堰	藤代村三世寺	三世寺橋	25	45.0	2.1	3.8	木橋	1
大和沢川	千年村小栗山	大和沢橋	23	41.4	2.3	4.1	土橋	2
平川	豊田村境関	境関橋	80	144.0	2.3	4.1	土橋	1
平川	藤崎村	藤崎橋	75	135.0	3.0	5.4	木橋	1
平川	石川村	石川橋	28	50.4	1.5	2.7	木橋	1
平川	蔵館村長峰	長峰橋	28	50.4	0.8	1.4	木橋	1
平川	碓ヶ関村	碓ヶ関橋	17	30.6	2.3	4.1	木橋	1
浅瀬石川	尾上村追子ノ木	浅瀬石橋	40	72.0	2.3	4.1	木橋	2
浪岡川	浪岡村	浪岡橋	18	32.4	2.3	4.1	土橋	1
十川	栄村広田	広田橋	24	43.2	2.3	4.1	木橋	1
十川	栄村姥池	姥池橋	18	32.4	2.3	4.1	木橋	1
十川	沿川村五林平	十川橋	17	30.6	2.3	4.1	木橋	2
金木川	金木村	金木橋	14	25.2	2.3	4.1	木橋	1

※ 『津軽平野と岩木川のあゆみ』⁵⁾ にメートル換算値、分類番号を追記

※ 1間(けん)=6尺=1.8181818m

※ 分類番号とは、名称由来を分類した番号で、2.4に内容を記載する。

表5. 明治時代末期 流域の大橋架設状況

河川名	所在地	橋名	長さ		幅		橋質	分類番号
			(間)	(m)	(間)	(m)		
岩木川	弘前市駒越	岩木橋	50.0	90.0	2.0	3.6	木橋	2
岩木川	弘前市悪戸	上岩木橋	45.0	81.0	2.0	3.6	木橋	2
岩木川	弘前市浜ノ町	富士見橋	44.0	79.2	2.4	4.3	木橋	3
岩木川	板柳村板柳	幡龍橋○	90.0	162.0	2.0	3.6	木橋	5
岩木川	鶴田村菖蒲川	保安橋○	90.0	162.0	2.0	3.6	木橋	4
岩木川	鶴田村鶴田	鶴寿橋○	90.0	162.0	2.0	3.6	木橋	5
岩木川	五所川原市	乾橋	76.3	137.3	3.2	5.8	木橋	3
平川	大鰐村	納涼橋○	20.0	36.0	1.0	1.8	木橋	5
平川	碓ヶ関村	古懸橋○	25.0	45.0	1.4	2.5	木橋	5
平川	大鰐村	相生橋○	25.0	45.0	2.0	3.6	木橋	5
平川	大鰐村	福島橋	27.0	48.6	2.0	3.6	木橋	5
平川	大鰐村	船国橋	26.0	46.8	3.0	5.4	木橋	4
平川	大鰐村	大鰐橋	23.0	41.4	2.0	3.6	木橋	1
平川	大鰐村	虹貝橋○	21.0	37.8	1.3	2.3	木橋	5
平川	石川村	幸橋	42.0	75.6	3.0	5.4	木橋	4
平川	豊田村境関	境関橋	90.0	162.0	2.0	3.6	木橋	1
平川	藤崎村	藤崎橋	78.0	140.4	3.2	5.8	木橋	1
大和沢川	千年村	千年橋	32.0	57.6	2.0	3.6	木橋	1
大和沢川	千年村	大和沢橋	32.0	57.6	2.0	3.6	木橋	2
浅瀬石川	山形村	青荷橋○	21.0	37.8	1.3	2.3	木橋	5
浅瀬石川	山形村	中島橋○	30.0	54.0	1.1	2.0	木橋	5
浅瀬石川	山形村	落合橋○	30.0	54.0	0.4	0.7	木橋	5
浅瀬石川	浅瀬石村	浅瀬石橋○	27.0	48.6	1.4	2.5	木橋	1
浅瀬石川	尾上村追子ノ木	千歳橋	57.0	102.6	2.0	3.6	木橋	5
山田川	車力村	鷲泡橋○	20.0	36.0	2.0	3.6	木橋	5
山田川	車力村	貉泡橋○	23.4	42.1	1.4	2.5	木橋	5
山田川	館岡村	館岡橋○	23.3	41.9	1.2	2.2	木橋	1
山田川	館岡村	亀ヶ岡橋○	23.3	41.9	1.0	1.8	木橋	5
山田川	館岡村	筒木坂橋○	23.3	41.9	1.0	1.8	木橋	5

※ 『津軽平野と岩木川のあゆみ』⁵⁾ にメートル換算値, 分類番号を追記
 ※ 1間(けん)=6尺=1.8181818 m
 ※ ○は, 私費で架橋されたもの
 ※ 分類番号とは, 名称由来を分類した番号で, 2.4に内容を記載する。

多分に含まれていることが分かる。

④ 橋そのものに込めた思いから命名

弘前市土手町に架かる「蓬萊橋」の名称由来から、橋に込めた思いが伺える。もともとの「蓬萊橋」には正式名が無く、「土手の大橋」と呼ばれていた。この橋は、江戸時代初期の城下町形成期からあり、その目的は、東側から敵が弘前に攻め込んできたときに橋を落とし、敵を川向で足止めさせるためであった。1750年代頃に、「おめでたい名前に」ということから名前がつけられ、「蓬萊橋」となった。「蓬萊」とは、中国の伝説に出てくる「東方の海中にある不老不死の仙人が住む山」を意味する。この言葉の意味から、「津軽の治世が、長く続くように」、橋名に込められたと推察される。また、この時代の一般庶民に中国の伝説などを知っていたのだろうか。この命名は、庶民ではない、ある程度の知識者、身分層によるものではないだろうかと思われる。

⑤ 集落にまつわる事柄と結びつけた命名

板柳村板柳の「幡龍橋」の名前の「幡龍」とは、「大河に竜がとぐろを巻くところ」を意味する。この橋は、明治中頃に町の有力者が架橋したが、それまで橋は無く渡船が交通手段であった。橋名から考えられることは、岩木川の水害史である。「とぐろ」とは、蛇がからだを渦巻状に巻くことで、「とぐろを巻く」は、腰を落ち着けてたむろする意味となる。水害が多い土地には、水に関連した信仰、名称由来が多く存在する。このことから、岩木川の氾濫によって、苦労した集落の思いが橋の名前に込められたと考えられる。

3. ま と め

岩木川に架かる橋は、時代とともに歩んできた。江戸時代、名も無き橋が多いが、生活道の役目を担う重要な



図1. 明治時代の初期から末期に架設された橋

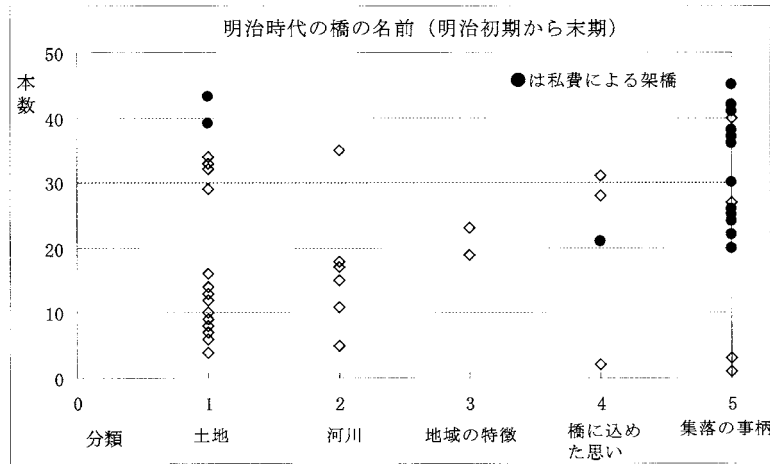


図2. 明治時代の橋の名前 (明治初期から末期)

ものであった。明治時代に入り、津軽地域は、渡船から橋の時代となり、名前を付けた大橋が架橋されて行く。江戸、明治時代の橋は、以下のようにまとめられる。

- ・江戸時代の中、南、北津軽郡の橋の種類は、土橋、石橋、木橋の順である。
- ・石橋の多くは小橋で、歩いて渡れる程度の川幅であったと考えられる。
- ・木橋は、川幅の広い箇所には架けられ、流失など水害被害を多く受けたと考えられる。
- ・土橋は、生活道に架けられ、中小規模の橋であったと考えられる。
- ・明治時代初期は、弘前市周辺を主体に架設された。
- ・明治時代末期は、橋梁技術が発達し、長径間の架橋が可能となり、架設箇所が増えた。

岩木川に架かる橋の歴史をまとめた中で、古い時代から現在まで使用される橋の名前には、以下の傾向にある。

- ① 橋が架けられた土地の名前から命名された。
- ② 橋が架けられている河川名から命名された。
- ③ 橋がどこに架かっているのか、橋の名前に地域の特徴を入れて命名された。
- ④ 橋そのものに込めた思いから命名された。
- ⑤ 集落にまつわる事柄と結びつけた命名された。

橋の“名前”の結果から次のようにまとめる。

① から ③ について

- ・その時代の公的機関が、自分のために架橋し、管理しやすい名称を設定している。
- ・その時代の公的機関が、管理しやすい名称の他に、地域の特徴を含めた名称を設定している。

④ から ⑤ について

- ・私費で架橋された多くは、“地域生活者の橋”であり、架橋の思いを名前に込められている。
- ・“地域生活者の橋”は、地域の持つ地史、集落の歴史などを集約した名称にし、橋に命名した。

これからの橋梁デザインにどのように地域感性を取込

むのかについて、まとめていきたい。ただし、ここで考える橋とは、長大橋梁ではなく、生活に密着した中小の橋である。

現代の橋には、架設された橋、新設される橋がある。また、架設された橋には、現況維持、改築の2種類がある。今まで述べてきた橋の“名前”は、既に架設された橋である。

新設される橋は、名称やデザインが話題になる。特に、新設される橋は、本体デザインと周辺地域との調和を考慮し、橋の形、色などが地域に溶け込むように考えられる。さらに、橋の名前は、公募や郷土史に因んだものが付けられる。一方、既に名前を持つ橋で改築されるものは、予算の問題もあるが、欄干など橋の景観デザイン面で、地域を代表する事柄を組込むことが多い。

今後、考えられる橋梁デザインでは、どのように地域の感性を取込むのか考えなければならない。これは、新設の橋と共に、特に改築される橋で考えられるべき点である。

橋は、地域の生業・交通など生活の中にあり、生活者の心象にも深く関わるものである。既に名前を持つ橋は、特にこの傾向が強い。これは、橋を通したひとつの地域感性である。その感性を受け継ぐ、現在の地域生活者が、“地域の橋”に対する思いを明確なテーマとし、それと連動、反映させたデザインが重要ではないだろうか考える。

参考文献

- 1) 丸山雍成, 小風秀雄, 中村尚史: 日本交通史辞典, 吉川弘文館, 2003
- 2) 宇野修平: 日本街道総覧, 吉川弘文館, 1967
- 3) 三上礼三郎: 橋のあゆみ, 伊藤印刷株式会社, 1974
- 4) 長尾角左衛門: 岩木川物語, 国書刊行会, 1965
- 5) 建設省東北地方建設局青森工事事務所: 津軽平野と岩木川のあゆみ 岩木川治水史, 社団法人東北建設協会, 1999
- 6) 青森県教育庁文化課: 青森県近代化遺産総合調査報告書, 青森県教育委員会, 2000

- 7) 青森県：青森県大規模行為景観形成基準ガイドプラン，青森県企画部企画調整課，1997
- 8) 青森県：青森県公共事業景観形成基準ガイドプラン，青森県企画部企画調整課，1997
- 9) 東奥日報：橋のある風景，1991～1992
- 10) デーリー東北新聞社：橋のある風景，2003～2004.5.18
- 11) 毎日新聞青森支局：青森百年，毎日新聞青森支局，1969
- 12) 北の都市と流域を語る会：青い森と堤川，北の街社，1985
- 13) 青森県高等学校地方史研究会：青森県の歴史散歩，山川出版，2001
- 14) 松田弘洲：津軽地名の語源，あすなろ舎，1984
- 15) 景観デザイン研究会：景観用語辞典，彰国社，1998
- 16) 石井一郎：日本の土木遺産，森北出版，1996
- 17) 石井一郎：土木の歴史，森北出版，1994
- 18) 高橋 裕：現代日本土木史，彰国社，1990